

言語発達障害児の呼称課題における誤答分析

新潟医療福祉大学言語聴覚学科
吉岡豊

【背景・目的】

言葉に遅れを示す子供たちが示す症状の一つに語彙の乏しさがある。吉岡¹⁾は言語発達障害児の語彙力を検討し、全例が生活年齢よりも低い語彙年齢である一方で、広汎性発達障害児では表出語彙年齢が理解語彙年齢を上回る例の存在することを示した。しかし、語彙の乏しさが量的なものに限定されるのか、質的にも異なるかについては明らかとはなっていない。小坂²⁾は定型発達児の語彙獲得過程および呼称の誤り方について、標準化された語彙検査を用いて検討している。本研究では、小坂²⁾を参考にして、広汎性発達障害児と知的障害児が呼称課題でどのような誤答をするのかについて検討した。

【方法】

対象：対象は新潟医療福祉大学言語発達支援センターを利用していた広汎性発達障害児8例（男6，女2）と知的障害児5例（男3，女2）の計13例であった。広汎性発達障害児の平均年齢は5歳11か月±1歳1か月、知的障害児の平均年齢は5歳4か月±1歳3か月であった。

手続き：全例に対して、田研出版言語発達診断検査（田研式）にある語彙検査（呼称：表出語彙）を実施した。症例によって実施可能な問題数に差があるので、本研究では全80呼称課題中40問までを分析の対象とした。その他、全例に絵画語い発達検査（PVT-R）を実施した。なお、田研式からは表出語彙年齢、PVT-Rからは理解語彙年齢を算出できるが、算出可能な得点に到達しなかった例については遠城寺式乳幼児分析的発達検査にある発語と言語理解の発達年齢を語彙年齢とした。

誤答分析：小坂²⁾に従って、呼称の誤りを表1のように分類した。ただし、幼児語は検査の基準に従って誤答とし、その他に身振りとワードパーシャルを追加した。

表1. 呼称の誤答分類

目標語と同一品詞の誤答：上位語、下位語、等位語
目標語の機能的要素表現：属性、機能、機能的文脈
無関連：無関連語、絵への誤った解釈、無反応、
絵への誤った解釈関連、無意味音節
幼児語
ワードパーシャル（語の一部のみを発話すること）

【結果】

広汎性発達障害児の表出語彙年齢は平均4歳2か月、知的障害児は3歳0か月と有意差を認めた。一方、理解語彙年齢は広汎性発達障害児で3歳2か月、知的障害児では3歳8か月と有意差を認めなかった。

呼称課題40題（田研式）における誤答を表1に従って分類し、一人あたりの出現割合を図1に示した。この図から、知的障害児では無反応と無意味音節が最も多かった。一方、広汎性発達障害児では等位語への誤り（例：カブトムシ→クワガタムシ）が最も多く、上位語や下位語への誤りは少ない傾向にあった。その他、幼児語、身振り、ワードパーシャルは両方で認められたが、知的障害児でやや多い傾向にあった。

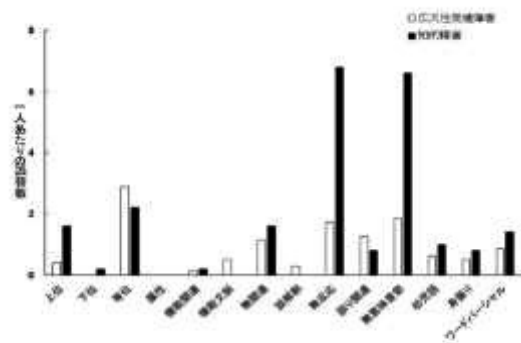


図1 呼称課題における誤りの分類

【考察】

本研究の結果、知的障害児で無関連の誤りが多かったが、この傾向は3歳前半の定型発達児における傾向（小坂²⁾）と類似していた。そのうち、無意味音節が多かった理由としては構音障害の影響が考えられる。一方、広汎性発達障害児では上位語や下位語への誤りが少なく、3歳前半の定型発達児における傾向（小坂²⁾）とは異なっていた。このことから、広汎性発達障害児では語彙の範疇化が不十分である可能性が示唆される。

【結論】

本研究の結果から、広汎性発達障害児と知的障害児では誤答傾向が異なり、語彙の乏しさは質的にも異なる可能性が示唆される。

【文献】

1) 吉岡豊 (2014) 言語発達障害児における語彙力の検討。発達障害支援システム学研究, 13(1), 13-19.
2) 小坂美鶴 (2012) 典型発達児の呼称課題における語彙の発達—誤りの分析から見る語意味とその構造—. 音声言語医学, 53, 212-218.